



Title	「トランスナショナルな子どもたち」が持つ可能性 : もう一つの背景
Author(s)	宮原, 暁
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 7-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「トランスナショナルな子どもたち」が持つ可能性 もう一つの背景

宮原 暁 大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授

「多文化共生」というコトバが市民権を得てすでにだいぶ経ちます。しかし、このコトバを手がかりにせざるを得ないと思っ
ても、「何か違和感がある」と感じている人も少なくないのではない
でしょうか。

「多文化共生」というコトバに込められた理想は、一見すると正
しそうに見えます。そこに何か巧妙なしかけが潜んでいる、など
とはなかなか言い出しにくい状況にあります。ですが、たとえば「移
民」や「マイノリティ」が政治的、経済的な力を持つようになったと
き——これは欧米諸国や東南アジアではしばしば見られるわけだ
ですが——多数派(マジョリティ)である日本人の多くが果たしてそ
うした事態に耐えられるだろうか、と考えたとき、「多文化共生」
がちょっとまやかしばくみえてこないでしょうか。「多文化共生」
とは、暗黙のうちに多数派(マジョリティ)と少数派(マイノリティ)
の力関係を固めてしまう装置にもなっているのです。

本稿では、こうした「多文化共生」をめぐる根深い問題を浮き彫
りにするために、「多文化共生」といったときの「文化」(エスニック
なもの)と「他の社会的な要素」(階層、ジェンダー、世代)を区別し、
その間のずれに着目してトランスナショナルな子どもたちの教育と
キャリア形成について考えてみます。そのうえで、子どもたちを支
援するサポーターたちが置かれた苦境とあわせて、社会が変化し
ていく方向性について展望してみたいと思っています。

今日、日本にはたくさんのエスニック・マイノリティが暮らして
います。しかし、そうした人たちのなかには、「エスニック」という
くくりを前面にうちだす人たちもいれば、そうではない人たちもい
ます。別の言い方をすれば、ある人にとって「エスニックなもの」は、
アイデンティティ——それ自体あやふやなものでもあるのですが

—のよりどころとなり、社会のなかで上昇していくための手がかり足がかりとなるかもしれませんが、他の人たちにとってはそのために上昇が妨げられるかもしれない、少し厄介なものになっているのです。

少なくとも選択肢という点で、本来、外国人であるなしにかかわらず、日本社会の一員である市民のキャリア形成は平等であるべきです。しかし、なかなか現実はそのようになっていません。そうしたなかで、エスニックなものを前面に打ち出してなんとか仕事にありつくことは可能かも知れません。しかし、そこでエスニックな枠組みが強く働けば働くほど、日本人と同様の上昇戦略をとることは、ますます難しいものになります。エスニックな枠組みが選択肢を狭めてしまうのです。

この点は微妙なところで、日本社会のなかで上昇をめざす個々の外国人の考え方によります。不利な条件を克服して上昇しようとする外国人も大勢います。逆に、エスニックなものを前面に出してキャリアを積んでいこうという人もいます。

とりわけ前者の人たちの視点からみて、「多文化共生」には、隠された政治的な意図があるように見えるかも知れません。外国人（ここでは外国籍を持つ人である場合も、周囲の人から「外国人」だと思われている人である場合も両方含みます）を「エスニックなもの」の枠組みに囲い込んでおくことは、彼らや彼女たちを管理する一つの手だてになります。エスニックな枠組みが強く働くところでは、その枠を超えた共感を得にくく、「多文化」という枠組みで管理することを容易にするのです。一方、外国人が個々の置かれた立場を足がかりにキャリア形成をめざすとすれば、階層、ジェンダー、世代などエスニックな枠組みではないところで他の市民との連携を図ることができ、別のかたちでの上昇が可能になるかも知れません。しかし、このことはマイノリティとしての一体感を失うことも意味しています。要は外国人を管理するのに、「多文化共生」の枠組みを用いて管理するのか、それともそれを断絶し、個人として管理するのか、といった違いなのです。このように外国人のキャリア形成にかかわる矛盾は、外国人に対する管理にも反映されています。ただし日本の行政が明確な政治的な意図をもって外国籍の市民を管理しているかどうかはわかりませんが。

こうしてみると「多文化共生」をめぐる問題というのは、害にも

益にもならない日本社会の「多文化化」ということではなく、行政による外国人の管理とのせめぎあいのなかで、日本社会がマイノリティの人材をどう活かすか、またマイノリティ自身がどうキャリアを形成していくかという問題に直結していると言えます。もう少しわかりやすく整理すれば、上で示したような行政による管理の枠組みに沿って、マイノリティの人材活用とキャリア形成をめざすのか、それともそうした枠組みをはるかに越えた地点で人材活用とキャリア形成をめざすのかが、いま問われているのです。もちろん、このような問いには、表面的な文化を扱うときには、想像もつかなかったような現実的ないやしさがどうしてもつきまいますし、そもそも「有用な人材」の幅は広く、なんらかの道筋をつけること自体、はばかれもします。しかし、今日の日本社会の問題は、こうした厄介な議論を避けてきたところにあります。その結果、多様であるはずの外国人の人材を「多文化共生」という狭い枠組みのなかに埋もれさせてしまったことは、真摯に反省しなければならぬと思います。

本書のテーマである「トランスナショナルな子どもたち」の教育を取り巻く矛盾と葛藤も、この点に起因しています。トランスナショナルな子どもたちを育てる仕組みという面で、子どもたちが持っている潜在的な力をうまくとらえることができていないことに加え、現場での教育を支える「サポーター」——業務の重さはとうの昔に「サポーター」の域を超えています——の処遇という面でもふれがみられるからです。

この点を、もう一度エスニックなものとうでないものとの対比に基づいて考えてみましょう。トランスナショナルな子どもたちのユニークさは、さしあたりさまざまな面で日本社会と海外をつなぐ存在となりえるところにあると言えます。わざわざ「さしあたり」と加えたのは、「日本社会と海外をつなぐ存在」ということが、じつは強みであると手放しでは言えないからです。この点は、あとの方でより肯定的なコトバを用いてトランスナショナルな子どもたちのユニークさをとらえ直したいと思います。

「日本社会と海外をつなぐ」といっても、トランスナショナルな子どもたちのなかには、バックグラウンドを外国に持ちながらも、日本的な環境になじんでいる子どももいれば、そうではなく、出身地との心理的なむすびつきがより強い子どももいます。言語ひとつとっても、日本語と外国語のバイリンガル、トリリンガルとい

うこともあれば、どちらか一方、あるいはどちらも不十分なセミリンガルな状態にあることもあります。

トランスナショナルな子どもたちは、何よりもまず多様です。そのうえで敢えてネガティブな面に目をむけるならば、日本の社会とも海外とも距離がある点に注意しなければなりません。進路指導や就職指導でその子どもが持っている「エスニックなもの」を伸ばしていくか、それともそうではないものを頼みとするかといった教育現場の迷いも、こうした距離を背景としています。トランスナショナルな子どもたちに外国語のネイティブなみの運用能力を期待することは、酷な場合もじつは少なくありません。もちろん、なかには外国語のとびぬけた運用能力とコミュニケーション能力を備えた人もいます。しかし、多くの場合、本国での教育経験がものを言い、就職等の面で留学生に勝てません。

かといって日本社会でのキャリア形成も思い通りになるわけではありません。あからさまな就職差別はさすがになくなったとはいえ、いくつかの業種で外国籍所有者、あるいは出身者の就職が不利になるものがあるからです。このため、国家資格や免許の取得が就職の条件となる職種は、外国人の間でも人気があります。

ガラスの天井というコトバがありますが、トランスナショナルな子どもたちにとってこのコトバが切実です。教育現場では、これは教師の本能に近いものだと思うのですが、どの子どもに対しても幸せを願い、「よい仕事」につけるよう、「よい学校」に入れるよう子どもたちを励まします。でもトランスナショナルな子どもたちにとって、目標は見えていてもガラスの壁に阻まれて手が届かない、ということも少なくありません。「文化の多様性はよいこと」と言いながら、多文化共生という枠組みがその頭を押さえつけているのです。

こうした苦境を正面から受けとめることが、トランスナショナルな子どもの教育を考えるうえで第一歩だと思います。そのうえで子どもたちが持っている真の強みとは何か。そうしたことを考えることが必要なのかも知れません。

先ほど、「日本社会と海外をつなぐ架け橋になる」という言い方が、必ずしもトランスナショナルな子どもたちのユニークさを言いあてていないのではないかと書きました。それはこの言い回しが、私たちがあたり前に思っている国家という仕組みと、国家が思い

描く国民のあるべき像にもとづいたものだからです。今日でそれほど強く意識されることはないのかも知れませんが、かつては一つの国家に一つの国民(のちに多民族国家を許していくようになるのですが)ということがあたり前だと考えられていました。どの国も、まずは自国民と外国人を区別して、それぞれの外国人を出身国によってとらえてきました。「多文化共生」は、言ってみれば「出身国が異なる人たちの共生」でしかなかったわけです。そこでは日本人と外国人との違いや、出身国の違いばかりが強調され、エスニックな枠組みを越えた共感が生まれにくい状況にあります。

トランスナショナルな子どもたちは、こうした枠組みを根本的に変える潜在的な力を持っているのではないかというのが、本稿で私が最も言いたいことです。その力のことを今福龍太氏は、「クレオール力」と呼んでいます。

私がここで注目したいのは、言語というような確固たる文化的体系ですら、接触や融合の結果として、伝統や一貫性から切り離された、「原型」への還元力につねにさらされているということの重要性についてである。すなわちこのクレオール化の力は、土着文化と母語の正当性を根拠として作り上げられてきた全ての制度や知識や論理を、全く新しい非制度的な口ジックによって無化し、人間を人間の内側から更新し、革新するヴィジョンを生み出す戦略となる可能性を秘めていると言える(今福龍太『増補版クレオール主義』筑摩書房、219頁)。

こうしたクレオール力は、今日、日本社会に蔓延する閉塞感を打ち破る、新たな文化を生み出す可能性を持っています。トランスナショナルな子どもたちは、日本語でも、またそれぞれの出身地のコトバでも語られなかった新しいものの見方や発想を生み出します。それは、古びた日本社会の上昇モデルにかわる、これまでにない生き方や働き方をもたらすことでしょう。

その胎動を予感しながら、日本社会はトランスナショナルな子どもたちをこれまでの枠組みにとり込めずに、大きく揺らいでいる。そういう段階なのかも知れません。確かにこれまでのやり方や仕組みを変えることは、骨の折れることのように思えます。しかし、私たちが「伝統」と呼んできたものも、じつは同じようなブ

ロセスを経て作られています。「文化」は何か起源のはっきりした、変化しないものではなく、つねに異なるものどうしの接触によって変わり続けるものなのです。

だとすれば、トランスナショナルな子どもたちがもたらす変化(大きなものも、些細なものも)の方向性を柔軟に受けとめることが、私たちにできることなのではないでしょうか。もちろん、それはトランスナショナルな子どもたちが生み出すもの一切切切を受け入れなければならないということではありません。むしろ、私たち自身が、トランスナショナルな存在であって、同じように新しい変化を生み出す主体であることを自覚すべきだろうということです。

この点は、トランスナショナルな子どもたちを最初に受けとめるサポーターたちのことと併せて考えると、わかりやすいかもしれません。今日、トランスナショナルな子どもたちには、日本語学習を支援するサポーターの他に、教科学習や生活支援、母語支援を行うサポーターたちがつけられます。このサポーターたちは、社会人類学などの高い知識と外国語の高度な運用能力を持ち、教育現場と子どもたちをつなぐコーディネーターとして重要な役割を担っているにもかかわらず、日本語のサポーターに比してもさらに雇用の面できわめて不安定なのが実情です。少なくともそれだけで生計をたてることはできません。学習支援の必要なトランスナショナルな子どもたちは、学校に多くて数名程度で母語もさまざまであることが多く、正規職員として雇用するなど、多額の予算をかけられない、といういいぶんが聞こえてきそうです。

にもかかわらず、できる限りサポートして欲しいという教育現場の声に押され、サポーターたちがボランティア(このコトバは、こうした意味で使用されるとき、ほんとうに嫌なコトバですね)でサポートしなければならないのが現状です。

こんなことを言うとサポーターの皆さんからは怒られそうですが、私はサポーターたちに安定した雇用を提供するよう主張するつもりはありません。現実ではないこともありますが、そうなることでサポートをする側と子どもたちの間に、大きな隔たりができてしまうことを懸念するからです。それでももう少し仕事をしやすい環境を整える必要はあると思っています。現在のようにあまりにも不安定な状態では、なかなかきちんとした責任あるサポートはできませんし、サポーターのなり手もいなくなってしまうから

です。

この「サポーターがもう少し仕事をしやすい環境」というところに、トランスナショナルな子どもたちの未来も、また私たちが暮らす社会の未来図もあるのではないかと思います。まさにサポーターが置かれている状況はトランスナショナルな子どもたちが置かれている状況と同じであり、私たちのすべてが置かれている状況でもあるのです。

近い将来、私たちがどのような変化のなかを生きているのか、今のところ予想だにつきません。しかし、トランスナショナルな子どもたちとサポーターが暮らしやすいようにしておくことはできるかもしれません。彼ら、彼女らにとって、終身雇用や正規雇用といった働き方、生き方は窮屈でしかなく必要ありません。仕事をシェアし、自由に働き場所と働き方を変えていく方が、クレオール力を存分に発揮できそうです。こうした変化は、すでにプロジェクトベースの雇用への切り替えを行っている企業や大学なども敏感に感じとっているのかもしれませんが、個々の雇い主がときどきで必要となる人材を使い捨てていては、社会がもちません。企業や教育機関、官庁に加え、NGOなどが人材交流システムをつくり、社会全体で雇用を安定させながら、人材を活用する仕組みが必要です。そうすればトランスナショナルな子どもたち、そしてサポーターたちも社会のなかに自分たちの居場所を得ることができでしょうし、ひいては社会がクレオール力を吸収することも可能になるのではないかと思います。

企業にせよ、教育機関にせよ、トランスナショナルな子どもたちが現れるまでは、国家と国民の枠組みのなかでいかに生産の効率をあげるか、いかに生産性の高い労働力を生み出すかということに終始してきました。しかし、いまそれらに求められているのは、変化を起こすための触媒としての役割です。とくに大学をはじめとする教育機関は、新たな変化の担い手を育てるという意味でその役割は重大です。外国人であるかいなかを問わず、日本社会を生きる私たち一人ひとりが問われているのは、そうした変化への準備ができていくかということではありません。むしろ、自分たちのなかにクレオール力を見つけることなのです。